

神河町史「自然・地理編」地質調査(その3)

氷期につくられた地形

神河町史調査員(地質) 橋元 正彦

新生代第四紀(258万年前～現在)は氷河時代であり、地球上に氷期と間氷期がくり返し訪れています。最近の研究によると、最終氷期の2万年前には、今より気温が10℃ほど低かったと考えられています。氷期には、岩石の割れ目に入った水が凍結し膨張することによって岩石を破碎する「凍結破碎^{とうけつはさい}」がさかんになります。このはたらきによって、神河町には周氷河斜面^{しゅうひょうがしゃめん}・岩塊流^{がんかいりゅう}・ロックフォール^{ろくせつめん}・麓斜面などの地形がつけられました。ここでは、周氷河斜面とロックフォールを紹介します。

1.周氷河斜面

急峻な山々の連なる神河町ですが、峰山高原、砥峰高原、太田池周辺、高星山周辺など標高の高いところに高原状の地形が広がっています。これらの高原は、(化石)周氷河斜面と呼ばれる地形です。

凍結破碎は、気温の低い高所でより激しく起こります。山頂部や突出部の岩石は破碎によって細かく割れ、そこで生まれた大小の岩塊、小石や砂が滑り落ちて山上の凹部を埋めました。その結果、起伏の少ない高原状の地形がつけられたのです。

峰山高原の「リラクシアの森」では、川の流れて削り取られたところに表土の下の地層が表れています。そこには、上部からここへ運ばれてきた大きな岩や岩の間を埋める小石や砂を見ることができます。



▲山上に広がる峰山高原(向こうに見えるのは暁晴山)

2.ロックフォール

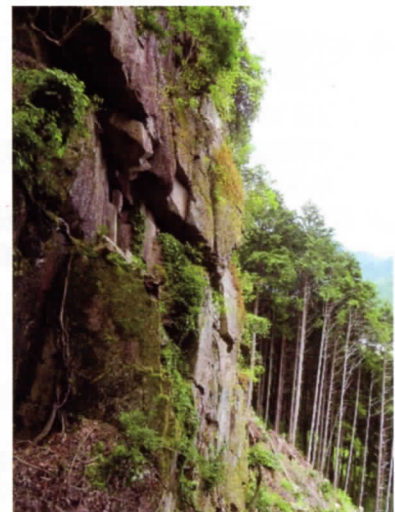
山頂近くや急斜面の岩壁の下では、そこから割れ落ちた大小の岩が斜面を埋めています。これをロックフォール^{ろくせつしゃめん}(岩屑斜面)と言います。

ロックフォールは、高峰や平石山など犬見川の両岸に連なる山々、笠形山から入相山へと続く山々、上小田の黒岩谷など、町内のいろいろなところで見られます。岩の重なる斜面を登っていくと、それらの岩をつくり出した岩壁が現れます。岩壁の中には、大山の「障子岩」、大川原の「ものいいだま」、上岩の「猿岩」などのように岩の名所となっているところもあります。

ロックフォールは、樹木に隠されてふもとからは見えません。しかし、神河町の山に足を踏み入ると、コケにおおわれて累々と重なる岩に木漏れ日の射す幻想的な光景が広がっています。



▲ロックフォール(大山「障子岩」の下の斜面)



▲上岩「猿岩」(この下にもロックフォールが広がっている)

『神河町史』の編さんを行っています！ Vol. 7

今月の広報でも、令和6年度刊行予定の神河町史 第1巻『自然・地理編』の地質調査でわかったことについて紹介しています。

今年の夏は、過去126年で最も暑い夏だったことが話題になりました。地球上には、今よりずっと気温の低い「氷期」という時代があり、砥峰高原や峰山高原などの高原や、山の斜面に割れ落ちた岩石が広がる地形はこの氷期につくられました。今回は、神河町史編集委員の橋元さんに、神河町の氷期につくられた地形について紹介していただいています。「歴史文化遺産特別ニュース」20ページをご覧ください。



▲氷期の地形を踏査されている様子(上小田 黒岩谷)

神河町の歴史文化遺産

